慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「モオルドンの戰」の歌
Sub Title	
Author	厨川, 文夫(Kuriyagawa, Fumio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1938
Jtitle	史学 Vol.16, No.4 (1938. 4) ,p.31(529)- 72(570)
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19380400-0031

「モオルドンの戰」の歌

厨川文夫

一

紀元九七九年、England の王位に卽いたのは Æthelred である。此王の在位三十七年間、England の民は内に王の惡政を忍び、外からは Danes の侵入で脅かされ、まことに Eadgar 王の時代（九五九—九七五）とは打つて變り、塗炭の苦痛を嘗めねばならなかつた。*Anglo-Saxon Chronicle* (MS. Cotton. Tiberius B. i) の筆者は、九七九年の項に Æthelred 王の卽位を敍し、その直ぐ後に次の樣な不氣味な記事を附け加へてゐる。

「これと同じ年、火に似たる血色（ちいろ）の雲屢々現はれぬ。夜半には、最も著しく現はれて、樣々なる光の筋の姿となりぬ。夜明けむとするに到りて消え失す。」(þy ilcan geare wæs gesewen blodig wolcen on oft siðas on fyres gelicnesse *and* þæt wæs swýþost on middeniht oþywed. *and* swá on mistlice beamas wæs

gehiwod. þonne hit dagian wolde. þonne toglád hit.[註一])

(註一) John Earle and Charles Plummer, *Two of the Saxon Chronicles Parallel*, Vol. I, Oxford, 1892, p. 122.

この記事にある樣な現象が例へ今日起つたとしても、我々はそれを後世に傳ふべき重要記錄書に書き留めるであらうか？　例へ珍奇な現象としてこれを記錄に殘すとしても、此年中での最も大なる歷史的事件として、自國の君主の卽位と共に此空の奇現象唯一つを擇び出すであらうか？　MS. Cotton. Tib. B. i. の筆者は、Æthelred 王の卽位と、この空の奇現象とのみを紀元九七九年に於て記錄の價値あるものと認め、その他の事柄は全く記して居ない。しかも、王の卽位の記事は二十九語で盡きてゐるのに對し、この深夜に血の色したる雲が現はれるといふ記述には三十四語を費してゐる。此寫本を書いた Anglo-Saxon 人（恐らく Abingdon の僧侶[註二]）の心に、この奇怪な現象の話が傳へられた時、深甚な感銘を惹き起したことは推測に難くない。彼は恰も妖怪變化を見たかの如く、此一節を氣味惡い言葉で綴つてゐる。

(註二) A. Brandl, *Geschichte der altenglischen Literatur* (Pauls *Grundriss der germ. Philologie*[2]), I. Teil. Strassburg, 1908, S. 179.

此記事と明かに同一の筆者の筆になる同一寫本の前年（九七八年）の項には Eadward 王が殺害されて、其弟 Æthelred が王國を繼承するといふことが誌されて居る。又別の寫本 (MS. Laud 636[註三]) には九

七九年の項に Eadward 王が殺害されたといふ散文の記述の後に、不規則な韻文で、天帝が彼の仇を報じた、とある。

(註三) Earle-Plummer, *Two of the Saxon Chronicles Parallel*, I, p. 123.

この不規則な韻文は長短二十四行よりなるものである。これは、此年代記作者が、人口に膾炙した一篇の ballad か乃至は數篇を採つてこれを分解し、新に語を加へて、もとの規則正しい調子を崩した上で *Chronicle* の記事に織り込んだものであらうと解釋されてゐる。(註四)

(註四) *The Cambridge History of English Literature*, Vol. I, 1920, pp. 138-139.

斯くの如き ballad を口誦んだ一般民衆は、Eadward 王の殺害に續く Æthelred 王の治世を天帝の怒りを受けた時代と考へたであらう。又 William of Malmesbury (一一四三歿?) の語る所によれば、高僧 Dunstan が Æthelred 王の卽位に際して、不吉な豫言をしたといふ。Dunstan は、王の頭上に冠を置き終つてからかう言つた。——「玉座への汝の道を開かむがために流された汝の兄の血は、汝自身と汝の子孫を苦しめ、笏が外國人(とつくにびと)の國へ移るまでは、劒は、汝の家を訪れることを罷めぬであらう。」(W. Malmesb. de Gest. Reg. Ang., p. 162; Eadmer, Vit. Dunst., p. 113.)(註五)

(註五) T. Wright, *Biographia Britannica Literaria: Anglo-Saxon Period*, London, 1843, p. 456.

果して William of Malmesbury の傳ふるが如く、Dunstan が事實さういふ不吉な豫言をしたか否かは

確かめる事が出來ない。然し Eadward の殺害に續く Æthelred の治世が始めから、「血」や「火」で象徴され得るものであつたからこそ、かの Abingdon の僧も、あの「火に似たる血色の雲」（'blodig wolcen…on fyres gelicnesse'）の出現を殊更に取り上げ、これを無氣味な不吉な言葉を以て年代記に書き誌したものではあるまいか？　これと同樣の空の現象のことが九七一年前後に書かれた『ブリクリング説教集』（*Blicling Homilies*, ed. R. Morris, E.E.T.S., p. 91）にもあるが、そこでは最後の審判の日の徴候の一つとして述べられてゐる。――「茲に於て北の方より血の色したる雲立ち上る」（'þonne astiged blodig wolcen from norðdæle'）。當時、紀元一〇〇〇年には此世の終が來るといふことが一般に信じられてゐた。(註六)『ブリクリング説教集』を書いた僧は好んで此世の終末の近きを説いて世人を戒めてゐる。彼は説く。――「よつて、此世界の終りが甚だ迫つてゐることは、吾々が今や見ることが出來、知ることが出來、些かの躊躇なく認め得る所である。幾多の危險が現はれた。人の惡しき業と過ちとは甚だしく增した。かくて、我々は人の住む國中遍く怖るべき罰と恐ろしき死とが人々の許へ來たことを日々耳にする。」（Magon we þonne nu geseon ond oncnawan ond swiþe gearelice ongeotan þæt þisses middangeardes ende swiþe neah is, ond manige frecnessa æteowde, ond manna wohdæda ond wonessa swiþe gemonigfealdode; ond we fram dæge to oþrum geaxiaþ ungecyndelico witu ond ungecyndelice deaþas geond þeodland to mannum cumene.）(註七)

(註六) *Cambridge Hist. of Eng. Lit.*, I. p. 115.

(註七) *Blickling Homilies*, ed. R. Morris, I. p. 119. Ælfric も九九〇—九九一年に書いた説教集 *Homiliae Catholicae* の序文で、紀元一〇〇〇年の此世界の終に就いて述べてゐる (H. Sweet, *Selected Homilies of Ælfric*, Oxford, 1922, p. 3).

我々は Abingdon の僧の「火に似たる血色(ちいろ)の雲」の記述の中に、此世の終りの近づきを想像して不安におびえた、當時の Anglo-Saxon 人の心の一つの現はれを見るのである。單に、夜半赤い雲が現はれたに過ぎない事も、此世界の終りの近づいた徵候なりと信ずれば、重大事件になる。かくて Æthelred 王の卽位の他には此赤い雲の出現を、紀元九七九年中に起つた最大事件の如くに扱つた理由も肯かれる譯である。

然し、紀元一〇〇〇年の此世の終りを當時の人々にかくまでも深く信ぜしめ、單なる Aurora Borealis の出現にも戰々兢々たらしめたものが、ヨハネ默示錄の比喩を誤解した神學者連の力ばかりでなかつたことは言ふまでもない。Æthelred 王の呪はれた卽位の後、二年ならずして、一時終熄したかに見えた Danes の侵入が再び始まつてゐる。九八二年にはロンドンに大火災があつた (*Ang. Sax. Chron.* 及び *Florence of Worcester's Chron.* 同年の項)。九八六年には、王は Rochester の町を包圍したがこれを攻略する能はずして Rochester の僧正管區地方を荒した (*Ang. Sax. Chron.* 及び *Florence of Worc. Chronicle.* 同年の項)。其翌年には熱病が流行し、又家畜の傳染病が前代未聞の勢で England 全土に猖獗を

極めた(*Flor. Worc. Chron.*, anno 987)。然し人心を不安のどん底に陷れた最大の原因は、うち續く Danes の侵入であつた。惡政に疲弊した England の民は、北海を渡つて襲來する精悍な異敎徒 Danes の前には怯えた羊の群の如く、頑强な抵抗を試むる者は殆どなく、England 全土は彼等の破壞と掠奪に曝された。九九一年には Æthelred 王もまた Canterbury の大僧正 Sigeric 其他の言を容れて、侵入者等に一萬ポンドを支拂つて和を請ふの愚策に出で(*Ang. Sax. Chron.* anno. 991; 後段參照)、遂にその昔彼等自身の祖先なる Anglo-Saxon 人に征服された Britons の轍を踏むに到つたのである。一〇〇二年から一〇二三年にかけての York の大僧正に Wulfstan (Lupus とも言ふ)といふ者があつた。彼の作つた說敎文の中に『エゼルレエド王の御代のこと、デイン人等が最も甚しくイギリス人を迫害したるとき、イギリス人に與へたる Lupus の言葉』(*Sermo Lupi ad Anglos quando Dani maxime persecuti sunt eos, quod fuit in dies* [sic] *Æþelredi regis*) といふものが今日傳はつてゐる。(註八) 一〇一四年の作であるが、それまで Danes の侵入によつて惹起された國內の紊亂した狀態を如實に描いて餘す所がない。

(註八) *Wulfstan. Sammlung der ihm zugeschriebenen Homilien nebst Untersuchungen über ihre Echtheit*, Hrsg. von A. Napier. 1. Abt., Berlin, 1883, S. 156-167; H. Sweet, *An Anglo-Saxon Reader*, Oxford, 1922, pp. 87-97. ラテン語の標題は寫本 (Hatton MS.) のものによる。

火災や疫病や戰や饑饉と共に、不信仰、裏切、姦淫、誹謗、近親の鬪爭等、醜い道德頽廢の樣が、烈

々たる悲憤の言葉を以て綴られてゐる中で、茲に我々が特に注目したいのは、此時代のイギリスの武士や王や貴族がデイン人の襲來に直面して如何なる態度を示したかを述べてゐる部分である。「今や永らく内にも外にも何等よき事とてはなく、凡ゆる方面に戰と迫害、繁く頻りに起りぬ。而して今や永らくイギリス人等は全く勝を得しことなし。神の怒りによりて甚だしく意氣を挫かれ、而も海賊等（Danesを指す）は神の贊同によりて甚だしく强きため、屢々戰に際し一人（のデイン人）よく十人（のイギリス人）を敗走せしむることあり、時にはそれよりも少く、時にはそれより多きことあり。遍へに、我等（イギリス人）の罪業によりてなり。」（'Ne dohte hit nu lange inne ne ute, ac wæs here and hete on gewelhwilcum ende oft and gelome, and Engle nu lange eall sigelease, and to swyðe geyrgde þurh Godes yrre, and flotnemn swa strange þurh Godes Geþafunge þæt oft on gefeohte an feseð tyne, and hwilum læs, hwilum ma, eall for urum synnum'. ed. Sweet, p. 93.）又次の一節は、デイン人に金を拂つて和を請ふたことを諷してゐるものと考へられる。――「然れども我等が屢々被る此の侮りに報ゆるに、我等は我等を辱しむる者に對する尊敬を以てす。我等は常に彼等に支拂ひをなし、彼等は日々我等に辱しめを與ふ。彼等は破壞し、燒き、掠奪し、押收して船へ運ぶ。嗚呼、凡べてこれ等の災の中にあるもの此國民に對する神の明かにして眼に見ゆる怒りにあらずして何ぞや？」（'Ac ealne þæne bysmor þe we oft þoliað we gyldað mid weorðscype þam þe us scendað : we him gyldað singallice, and hy us hynað

dæghwamlice. Hy hergiaþ and hy bernaþ, rypaþ and reafiaþ, and to scipe lædaþ ; and la hwæt is ænig oþer on eallum þam gelimpum butan Godes yrre ofer þas þeode swutol and gesene ?' ed. Sweet, pp. 93–94.)

Wulfstan の言ふ所が、事實であつたことは、*Anglo-Saxon Chronicle*, anno. 992 ; 994 ; 998 ; 999 ; 1003 ; 1006 ; 1007 等の項を見たゞけでも明かである。然し少數よく多勢の Danes を向ふに廻して怯まず敢然戰つて屢々これを擊退した Ælfred 大王時代のイギリス人の氣魄を傳へた武士が、Æthelred 王の時代には最早全くなかつたのであらうか。*Beowulf* や *The Fight at Finnsburg* 等の古い Anglo-Saxon の敍事詩(註九)、更に溯つては Tacitus の書卷(註十)に現はれたやうな、Germania の英雄の理想は、此時代のイギリス人の間には既に滅び亡せて、異敎の Danes の間にのみ生き殘つてゐたのであらうか。

(註九) F. Kuriyagawa, "Beowulf and the Fight at Finnsburg" (*English Literature and Philology*, III), Tokyo, 1932.

(註十) *Germania*, 14.

ところが、この不安な末世の空氣を呼吸した Æthelred 王の時代のイギリスに於ても、なほ古代 Germania の英雄の精神は、全く滅び亡せては居なかつたのである。紀元九九一年、Maldon に於ける Danes(註十一) との戰を語つた一篇の史詩がある。其事件直後の作と考へらるゝものであるが、此詩によつて我々は、古代 Germania の精神の傳統が未だ消え失せずに一部の人士の魂の中に脈々として存在し、强烈な

力を以て周圍の怯懦な空氣に反撥したことを知るのである。『モオルドンの戰』(*The Battle of Maldon*)、或は此詩の中心人物の名に因り『ビユルフトノオスの死』(*The Death of Byrhtnoth*) と稱せらるゝ詩[註十二]が卽ちこれである。

(註十一) *Anglo-Saxon Chronicle* では 'Danes'(OE. 'Dene')と 'Northmen'(OE. 'Norðmenn')とを區別してゐない。例へば七八七年の項には次の記事がある。「この年 Brihtric 王は Offa の娘 Eadburg を娶りぬ。而して彼の時代に Hereðaland よりはじめて Northmen の (OE. 'Norðmanna') 船三隻來りぬ。」は、Dane 人の (OE. 'Deniscra manna') 船の中 England を訪れし最初のものなりき。」('Her Brihtric cing nam Offan dohter Eadburhge to wiue, *and* on his dagan coman ærost .iii. scipa Norðmanna of Hereða lande. Þæt wæran ða ærostan scipa Denisera manna ðe Angelcynnes land gesohton.' MS. Cotton. Domitian A. viii. ed. Earle-Plummer, p. 54). 紀元九九一年 Maldon に襲來したのは Norway の軍勢であつたと信ずべき根據がある。後段 (一二頁以下) 參照。

(註十二) 原詩には、他の大多數の OE. (=Old English) の詩と同樣、標題は附いてゐない。J. J. Conybeare は *Illustrations of Anglo-Saxon Poetry* (London, 1826), pp. lxxxvi-xcvi に於て此詩を '*The Death of Byrhtnoth*' と名附けた。以後ドイツの學者には此名稱を用ふる者が多い ('*Byrhtnoðs Tod*', etc. 例へば Grein, Wülker, Ettmüller, Kluge, Rieger, 其他)。然し英米の學者は一般に玆に私が標題に使つた名稱で呼んで居る (Sweet, Bright, Sedgefield, Ashdown, 其他)。

二

Humphrey Wanley は、千七百五年に Oxford から出版された古寫本の書誌[註一]の中 (p. 232) で、Sir

Robert Cotton (1570–1631) の藏書中にある寫本、'Otho A. XII.' と番號をつけられた四つ折判の羊皮紙の codex を記述し、其內容を簡單に述べてゐる。——

MS. Otho A. XII. Cod. memb. et antiquus in Quarto, in quo, post illud Asserii Menevensis exemplar, quo usus est Dr. Matthæus Parker Archiep. Cant. statim sequuntur Saxonice I. Exorcismus contra Melancholiam. II. Exorcismus Prolixiop contra frigora et febres. III. Fragmentum capite et calce mutilum, sex foliis constans, quo Poetice et Stylo Cædmoniano celebratur virtus bellica Beorhtnothi Ealdormanni Offæ et aliorum Anglo-Saxonum, in prælio cum Danis.(註二) (寫本 Otho A. XII. 四つ折判の羊皮紙の古き codex. その中にカンタベリの大僧正 Matthew Parker 博士の用ひたる、かの Asserius Menevensis の寫し(註三)の直ぐ後に、サクソン語〔古代英語の意、一譯者〕で次のものが續いてゐる。一、憂鬱に對する魔祓ひの呪文。二、寒氣と熱とに對する一層長き呪文。三、初めと終りとの缺けた斷片、六葉〔六枚〕が殘つて居り、この中に Danes との戰に於ける大守 Beorhtnoth [=Byrhtnoth], Offa, 及び其他の Anglo-Saxon 人等の武勇が、詩として Cædmon の文體で讚くられてゐる。)

(註一) *Antiquæ literaturæ septentrionalis liber alter, seu Humphredi Wanleii librorum vett. septentrionalium, qui in Angliæ bibliothecis extant,…catalogus historico-criticus* (Vol. iii of George Hickes's *Thesaurus*), Oxoniæ, 1705.

(註二) このラテン文は R. Wülker, *Grundriss zur Geschichte der angelsächsischen Litteratur*, Leipzig, 1885, S. 335 に轉載されたものに據る。

(註三) 千五百七十四年、Matthew Parker がロンドンで出版した Asser 作のアルフレド大王の傳記、*Ælfredi Regis Res Gestis* は此寫本 (MS. Otho A. XII) の text を用ひたるもの (L. C. Jane, *Asser's Life of King Alfred*, London, 1926, p. li)。

この(三)に「Danes との戰に於ける大守 Beorhtnoth, Offa, 及び其他の Anglo-Saxon 人等の武勇が、詩として Cædmon の文體で讃へられてゐる」とある、始めと終りとの缺けた六葉の斷片こそ、玆に *The Battle of Maldon* として扱ふ詩の原寫本のことなのであるが、この寫本 (Cotton. Otho A. XII.) は、千七百三十一年、Sir Robert Cotton の書庫に起つた火災で灰燼に歸してしまつた。Anglo-Saxon 時代の末期、Æthelred の時代に僅かに殘つた Germania の英雄精神を今日に傳へる此貴重な文獻は、若しもかの詩人 Alexander Pope が諷刺詩 *The Dunciad* (III, 185 ff.) で辛辣な罵倒を浴せた有名な考古家 Thomas Hearne (1678–1735)(註四) の力がなかつたならば、今日我々は唯〻 Wanley の書誌等によつてその曾ての存在を知るばかりとなつたことであらう。

To future ages may thy dulness last,
As thou preserv'st the dulness of the past!

——A. Pope, *The Dunciad*, III, 189.

Hearne は、Cotton 書庫の火災に先立つこと五年、千七百二十六年 Oxford で出版した John of Glastonbury の年代記の附錄中に、*The Battle of Maldon* の詩を轉寫したものを附け加へて置いた。(註六) 今日で

はこれが此詩の text の唯一の根據となつてゐる。

（註四）Pope は Hearne のことを 'Wormius' と名附けてゐる（III, 188）。引用の句は、Globe Edition の text（p. 398）による。

（註五）Wanley の書誌より九年前、Thomas Smith は、『Cotton 書庫寫本目錄』（*Catalogus Librorum Manuscriptorum Bibliothecæ Cottonianæ*, 1696）の中に、MS. Otho A. XII. の第三の項目を「エアドリクス等に關する或る歴史の斷片。サクソン語にて。」（"Fragmentum quoddam Historicum de Eadrico, etc., Saxonice"）と記してゐる（M. Ashdown, *English and Norse Documents*, Cambridge, 1930, p. 4）。この「エアドリクス」と言つてゐるのは、*Maldon* の詩の始めの部分（第十一行）に出て來る Eadric といふ人名を見て書いたものに違ひないが、此詩の解題としては非常に不完全で、これでは全くそのおもかげが分らない。

（註六）*Johannis Glastoniensis Chronica sive Historia de Rebus Glastoniensibus*. Ed. Th. Hearnius, 2 vols. Oxonii, 1726, pp. 570-577. (R. Wülker, *op. cit.*, S. 334.)

扨、我々は此處でこの詩の寫本から眼を轉じ、再び Æthelred 王時代の England へ戻つて、この詩に描かれた事件を語らねばならぬ。

紀元九九一年、古代 Norway の王者の中の最も偉大なる王として北歐の詩に sagas に其輝く業績を謳はれた Olaf Tryggvason（在位、九九五—一〇〇〇）（註七）は船隊を率ゐて England の海濱に押寄せた。*Anglo-Saxon Chronicle* の筆者は次の様に述べてゐる。——

An. DCCCCXCI. Hér wæs Gypeswic gehergod, *and* æfter þam swiðe raðe wæs Brihtnoð ealdorman ofslegen æt Mældune. *and* on þam geare man gerædde þæt man geald ærest gafol Deniscan mannum. for

ðam micclan brogan þe hi worhtan be ðam særiman. Þæt wæs ærest ·x· þusend punda. Þæne ræd gerædde ærest Syric arcebiceop.(註六)

（九九一年。この年 Gypeswic [＝Ipswich] は掠奪せられ、而て其後まことに幾何もなく Mældun [＝Maldon] にて大守 Brihtnoð は殺害せられたりき。而てこの年 Dane 人等に、彼等が海邊にてなしける大いなる恐ろしき業の故に、最初の貢を支拂ふことゝ定めぬ。こはその初め一萬磅なりき。此提言は最初大僧正 Syric [＝Canterbury の大僧正 Sigeric] がなしけるものなり。）

これは MS. E (Laud, 636) の記事である。その他の MSS. も、MS. A 以外のものは盡く Maldon の戰を九九一年の項に置いて居る。所がMS. A (The Parker MS. C. C. C. C. 173) のみは唯獨り、九九三年の項にこれを置き、其上 Unlaf (＝Olaf Tryggvason) が三百九十隻の船を率ゐて來り、Maldon の戰に勝利を得た後、Æthelred 王が、彼を僧正の手によつて迎へたと記してゐる。(註七)

993. Her on ðissum geare com Unlaf mid þrim *and* hundnigontigon scipum to Stane, *and* forhergedon þæt ón ytan, *and* for ða ðanon to Sandwíc, *and* swa ðanon to Gipeswíc, *and* þæt eall ofereode, *and* swa tó Mældune, *and* him ðær com togeanes Byrhtnoð ealdorman mid his fyrde, *and* him wið gefeaht, *and* hy þone ealdorman þær ofslogon, and wælstowe geweald ahtan. *And* him man nam syðþan friðwiðe, *and* hine nam se cing syðþan to bisceopes handa, [ðurh Sirices lare Cantware biscpes, and

Ælfeages Wincaestre *biscopes*].(註九)

（九九三。この年 Unlaf, 三百九十隻の船を率ゐて Stan [=Folkestone] へ來り、外にてこれを劫掠しぬ。而してそれより Sandwich へ赴きぬ。かくてそれより Ipswich へ赴きて盡くこれを蹂躙し、かくて Maldon へ進みぬ。此地にて、大守 Byrhtnoð 己が軍勢を率ゐて彼等に向ひ來り、これと戰ひき。茲に於て彼等この大守を斃し、戰場の支配を得ぬ〔『勝利を得たり』といふ意の常套的表現〕。この後彼 [Unlaf] と和が結ばれ、《Canterbury の僧正 Sigeric と Winchester の僧正 Ælfheah との指金（さしがね）によりて》王は彼を僧正の手によりて迎へぬ。(註十)）

（註七）Olaf Tryggvason に關する古代 Norway の文獻には、『オオラアフ・トリユッグワソンの譚』（サーガ） *Óláfs Saga Tryggvasonar* (*Fornmannasögur*, III) cc. 285–286；『諸威諸王の譚の要略』（*Ágrip af Nóregs Konungasögum*), cc. 13–19；『聖オオラアフの譚』（*Óláfs Saga Helga*), cc. 20–24；『オオラアフに對する挽歌』（*Óláfsdrápa*）；『基督教譚』（*Kristni Saga*), c. 5 等がある。

（註八）Earle-Plummer, *Two Saxon Chron. Parrallel*, I, p. 127.

（註九）Æthelred 王が敎父となつて Olaf が堅信禮を受けたと言ふ意である。Earle-Plummer, *op. cit.*, II, p. 178；M. Ashdown, *English and Norse Documents*, p. 95.

（註十）Earle-Plummer, *op. cit.*, I, p. 126.

斯の如く、MS. A のみが Maldon の戰を九九三年の項に置き、而も他の MSS. に於ける Maldon の戰の記述には現はれて居ない、㈠ Unlaf [Olaf] の名を擧げ、㈡彼が三百九十隻の船を率ゐて來たこと、

(三)後に Æthelred 王が教父となつて Olaf が堅信禮を受けたこと、(四) Ipswich を攻略する前に Folkestone と Sandwich とを次々に襲つたこと、が這入つて居る。この MS. A には九九一年の項が缺けてゐる。他の MSS. には九九一年の項に Maldon の戰があり、そして右に擧げた(一)、(二)、(三)は九九四年の項に記載されてゐる。そこで MS. A の九九三年の記事は、他の MSS. の九九一年と九九四年とに正しく區別して記された二度の別な侵寇を混同したものと考へられる。かくて Maldon の戰の年代に就ては、MS. A. よりも他の MSS. に據つて、之を九九一年とする方が妥當だといふことになる。又 Maldon の戰で斃れた大守 (ealdorman) Byrhtnoð の署名が九九〇年以後の charters に全然現はれないといふことも、九九一年が正しいことを立證するものであらう。(註十一) 然しこの九九一年の侵寇にも Olaf Tryggvason が指揮者であつたことは、其年の平和約定文の序言を見れば明かである。——

Dis synd ða friðmal 7 ða forword, ðe Æthelred cyng 7 ealle his witan wiððone here gedon habbað, ðe Anlaf 7 Iustin 7 Guðmund Stegitan sunu mid waeron. (註十二) (こは Æthelred 王と彼の顧問官總てとが、Anlaf [=Olaf] と Iustin [=Jósteinn] と Stegita の子 Guðmund とが共にありし (註十三) [Northmen の] 軍勢と結びし平和の條款と協定なり。)

(註十一) Byrhtnoð の署名した charters は九五六年から九九〇年に亙つて居り、'Ego Byrhtnoth dux' と自分の肩書を 'dux' にしてゐる。たゞ九五六年、九月二十九日 Eadwig 王が 'Beorhtnoð' [Byrhtnoð] に Tadmarton の土地を授くる場合の char-

ter (ed. Birch, III, p. 152) には、'princeps' の稱號で呼ばれてゐる。Cf. Walter de Gray Birch, *Cartularium Saxonicum*, Vol. III, London, 1893 ; M. Ashdown, *English and Norse Documents*, p. 275.

（註十二）この平和約定文の全文は、F. Liebermann, *Die Gesetze der Angelsachsen*, I. Bd., Halle, 1903, S. 220-224 にあり、Liebermann はこれを九九一年に置いてゐる。引用の text も Liebermann, *op. cit.*, S. 220 に據つた。7 は 'and' の略字である。

（註十三）*Florence of Worcester's Chronicle*, anno 991 には、此年の入寇の指揮者は「Justin と Steita の子 Guthmund」(Justin et Guthmund filius Steitan) であつたと述べてゐる。

紀元九九一年、Olaf Tryggvason を始め、Justin や Guðmund の率ゐる諸威の海兵等は、Ipswich を劫掠して後、Essex の Maldon へ進んだ。これを邀へ擊つたのが ealdorman Byrhtnoð である。然し戰利あらずして Byrhtnoð は敢なくも斃れ、この年 Æthelred 王は、Canterbury の大僧正 Sigeric の提言により、Olaf 等に大金を支拂つて和を請ふに到つた。*Anglo-Saxon Chronicle* はこの金額を一萬ポンドとして居るが、其年の平和約定文（註十四）によればそれより遙かに多く、金銀併せて二萬二千ポンドに達してゐる。

（註十四）F. Liebermann, *op. cit.*, S. 224.

以上は比較的最も信頼するに足る資料が我々に傳へた Maldon の戰のアウトラインである。このほかに Maldon の戰の數年後に書かれた『聖オズワルド傳』（*Vita Sancti Oswaldi*）（註十五）があるが、この中に Byrihtnothus [=Byrhtnoð] が右手を以て「己が頭の白鳥の如き白髮を忘れて」(non reminiscens cigne-

am canitem sui corporis) 敵を打ちまくり、左手を以て「己が身の弱きを忘れて」(debilitationem obli-tus sui corporis) 自分を禦いだとあるので、此戰の時、Byrhtnoth が非常に老齢であつたことが分る。この後に「Byrhtnoth は倒れ、殘餘の者等は逃れぬ」(Byrihtnothus cecidit et reliqui fugerunt) と言つてゐるから、『聖オズワルド傳』の作者は、*The Battle of Maldon* の詩を知らなかつたらしい。詩の方では Byrhtnoth の倒れた後も、逃れた者は少數で、大多數の忠實勇敢な部下達は、逃れた者を罵り、主君の仇を報ひよと互に勵ましつゝ奮戰し、一人一人相次で倒れてゆく。

(註十五) *Vita Sancti Oswaldi* (*Historians of Church of York*, ed. J. Raine, I, pp. 399-475), p. 456.

其他に『Ramsey 史』(*Historia Ramesiensis*, cap. LXXI : "De Brithno Comite") と『Ely 教會史』(*Historia ecclesiæ Eliensis*, Lib. II, cap. VI) があつて、Byrhtnoth の最後の戰と、その戰へ赴く途上、Ramsey や Ely を通過したと述べ、その時の事を語つてゐる。然しこれ等は孰れも恐らく十二世紀の中葉以後に書かれたものであつて、當になる資料ではない。(註十六)

(註十六) W. J. Sedgefield, *The Battle of Maldon*, Boston, n. d., p. xii ; E. A. Freeman, *The History of the Norman Conquest of England*, I, Oxford, 1870, p. 624 は、Brihtnoth が自分の所領から Maldon へ行く途中 Ramsey や Ely を通過するといふ樣なことは考へ難い、『Ely 教會史』はこの難點を避けむがために Brihtnoth を East-Saxons の Earl とせずに Northumbrians の Earl とし、Maldon の戰を二度あつたことにしてゐる。一度目には Brihtnoth が勝つて Northumberland へ歸る、再び Danes が上陸する、Brihtnoth は Northumberland から戻つて來るが、途上 Ramsey と Ely との僧院を訪れる。二度目

の戰には「十四日間」の戰鬪の後、殺される。「エリとラムジの歷史にある、ブリヒトノスの話は可成作り話が混つてゐるらしい（"The accounts of Brihtnoth in the Histories of Ely and Ramsey seem to be mixed up with a good deal of fable"）と Freeman は言つてゐる。

前述のアウトラインを補ひ、Byrhtnoð と其部下の大部分の者等が如何に祖國と主君とのために雄々しく戰つたか、如何に悲壯な最後を遂げたかを最も如實に我々に語るものは、*The Battle of Maldon* の詩以外にはないのである。Max Rieger は、此詩の作者が敵軍の者の名、その指揮者 Olaf の名やへ擧げ得ず、且つイギリス軍側から觀察し得ることの他は言つて居ないといふことを指摘し、この詩は、Maldon の戰の直後に作られたものであると斷言した（*Alt- und angelsächsisches Lesebuch*, Giessen, 1861, S. XIII–XIV）。Henry Sweet（*An Anglo-Saxon Reader*, Oxford, 1922, p. 120）や Ten Brink（*Geschichte der englischen Litteratur*, Bd. I., Berlin, 1877, S. 118, 122）も Rieger と同說である。一方此詩の第二八七行に現れる「Gadde の血族」（'Gaddes mæg'）を敵の一人と見て、Rieger の擧げた理由には反對の說をなす學者もある（K. Körner, *Einleitung in das Studium des Angelsächsischen*, Heilbronn, 1880, S. 72–88 ; U. Zernial, *Das Lied von Byrhtoð's Fall 991*, Berlin, 1882, S. 12）。又現存する此詩は頭初と最後との部分が缺けてゐるので、Rieger の說を當にならぬとする者もある（Earle-Plummer, *op. cit.*, ii, p. 175）。然し Rieger の說は扨置くとしても、兎に角この詩は、Byrhtnoð と部下等の悲壯な戰

死が未だ人の記憶に生々しく殘つて居り、それを知る人々の心に未だ深い感動が消えやらぬ時に書かれたものに違ひない。これは、キリスト教に關係がなく、且つ政治的見地からすれば Brunanburh の戰よりも遙かに重要でない此事件を事更に題材として、此のやうな長篇(註十七)をものした動機を考へても推測され得ることであり、又此詩の生彩ある描寫からも感じ得る所である。更に又此詩の言語の特徴を調べて見ても(註十八)此推定に矛盾するものは全く見當らない。

(註十七) *Anglo-Saxon Chronicle*, 九三七年の項に、イギリス王 Æthelstan が Brunanburh で Danes の王 Anlaf (Olaf Tryggvason とは別人)と戰つて勝利を得た華々しい國家的事件を詩に書いてある。これは alliterative long line にして七十三行の長さである。*Anglo-Saxon Chronicle* 含まれた其他の史詩では九七五年の項にあるもの(三十七行)が最も長い。これに對し *The Battle of Maldon* は、頭初と終りとが缺けてゐるにも拘らず、現存する部分のみでも三百二十五行になる。

(註十八) 拙稿『The Battle of Maldon の言語に就いて』(廣島文理科大學英語英文學研究室編輯「英語英文學論叢」第六號、六四—七五頁)

從つて此詩の中の、戰の主要な事實と人物の名とは作者の創作したものでなく、實際あつたものと信じてよいと思ふ。「よしやこれより一世紀か二世紀後のラテン語の年代記中にそれ等が見出されるとしても、それよりも遙かに信を置くに足る」("Much more so [i. e. 'trustworthy'] than if they were found in a Latin prose chronicle a century or two later") と E. A. Freeman (*The Hist. of the Norm. Conq.*, I, p. 268, n. 4) は言つてゐる。たゞし此詩の中の人物の言葉遣ひは、作者の創作したものであ

ることは言ふまでもない。

三

茲に *The Battle of Maldon* の拙譯を掲げる。此詩の寫本は前にも述べた如く、千七百三十一年に燒失してしまつたものゝ寫し（Hearne の名の頭字をとつて通例 H. として現はす）が唯一種現存するに過ぎない。從つて個々の edition の間に見られる text の相違は、全く各 editor 自身の補足と改訂とに因るもののみで、此等はまことに僅少である。斯の如き場合筆者は、editions を對比考覈して就中最も適當と認めた reading に據つて譯すことにした。譯文は努めて意譯を避け、能ふ限り原文に忠實ならんことを期した。

Editions :—C. W. M. Grein und R. P. Wülcker, *Bibliothek der angelsächsischen Poesie*, Bd. I., Kassel, 1883, S. 358–373 ; F. Kluge, *Angelsächsisches Lesebuch*, 4. Aufl., Halle, 1915, S. 122–129 ; M. Rieger, *Alt- und angelsächsisches Lesebuch*, Giessen, 1861, S. 84–94 ; K. Körner, *Einleitung in das Studium des Angelsächsischen*, 2. Teil : Texte, Heilbronn, 1880, S. 72–88 ; M. Ashdown, *English and Norse Documents*, Cambridge, 1930, pp. 22–36 ; H. Sweet, *An Anglo-Saxon Reader*, 9 th ed., Oxford, 1922, pp. 120–130 ; J. W. Bright, *An Anglo-Saxon Reader*, 3 rd ed., New York, 1894.

*　*　*　*　*　*　*

譯中、（　）を用ひて包んだ言葉は、譯文の意味の補足であるから、讀者には譯に含めて讀んで戴いて差支ないものである。「　」に入れた言葉は譯文の說明であるから、譯とは別にして讀んで頂きたい。例。l. 64 : —其處にて軍勢は、水のため、他〔相手方〕の許へ（行く）能はざりき。（Ne mihte þær for wætere werod to þam oðrum.）

（ll. 1–16.）……は破られたり。[註1] 茲に於て（彼〔Byrhtnoð〕は）武士等の各々に馬を棄てゝ遠くへ逐ひ

遣り、而して前進し双手と猛き心とに頼れと命じ給ひぬ。爰に於て Offa の血族(註二)は殿 [Byrhtnoð] が懶惰の振舞を許すまじと思ひ給へることに先づ心附きぬ。かくて彼は、己が手より、愛(いつくし)みたる鷹(註三)を森の方(かた)へ飛ばしめ、戰へと歩みを進めぬ。これによりて人は、この若者が、武器を執りしからには戰にて怖氣づくことなからむと思ひしことを認め得たるなり。彼のほか、Eadric も己が主君、殿を戰に力添へし奉らむと思ひき。茲に、戰へと槍を携へて進みぬ。彼は双手もて楯と幅廣き劒とを握り得し間はゆるがざる心を持ちてありき。彼は己が主君の御前に戰ふべき時に當りて誇らかなる言葉〔誓〕を行ひ果しけるなり。

(ll. 17–24.) 爰に於て Byrhtnoð は人々を勵まし始めぬ。馬に跨りて助言を與へ、武士等に如何に彼等が立ちて其位置を保つべきかを指示(さししめ)し、而して己が楯を手もて確と眞直に保ち、ゆめ怖れざることを求めぬ。とくと其隊を勵まし了へて後、彼は己に最も好ましき處、彼が己が家臣を最も忠誠なりと知りたる場處、人々の間に下(お)り立ちぬ。

(ll. 25–28.) 時に水際(みぎわ)(註四)には、海賊の使者立ちて烈しく呼びかけ、言葉もてもの言ひぬ。彼は、彼 [Byrhtnoð] が岸邊に立ちし時、傲然とこの領主に向ひて船人等の言傳をば告げぬ。

(ll. 29–41.) 「我をば猛き船人らは汝の許へ遣し、汝に斯く言へと命じたり。——汝は速かに(身の)安泰と引換に寶環を送らざるべからず。而して汝等は貢もてこの攻擊を贖ひ避けたらむ方が、斯くも強

き我等戰を（汝等に）加へむよりは、汝等がためなるべし。もしも汝等そを果し得ば、我等は互に殺し合ふの要なし。我等は黄金と引換へに平和を結ばむと望むなり。此地にて最も富みたる汝が、若し民をあがなひ、船人等に彼等自らの思ひのまゝに平和と引換へに財物を與へ、我等より和を得むと望むならば、我等はその貢物もちて船へ行き、海上へ赴き、汝等と和を保たむと望むなり。」

(ll. 42–55ᵃ.) Byrhtnoðは申しき、楯を握り、か細き槍をしごき、怒に燃えて心きつと言葉もて語りぬ、彼に應答を返しけり。「海賊よ。汝は此軍勢が何を言へるかを聞きたるや？　彼等は貢として汝等に槍、毒附けたる槍鋩と古き劍、戰にて汝等には役立たざる武具を與へむと望むなり。海賊共の使者よ、戻りて告げよ、此處には此國、Æþelredの國、我が主君の民と土地とを護らむとする譽高き太守が彼の軍勢と共に立てりてふ大いに忌はしき報せを汝等の國人に語れ。邪宗の者らは戰に倒るべきなり。

(ll. 55ᵇ–61.) 汝等かくも遠く此處まで我等が祖國の中へ入り込み來りしからには、汝等戰を挑まるゝこともなく我等の貢物もちて船へ行くてふことは餘りにも面目なきことゝ思はる。汝等にはさまで易々と寶を贏ち得させまじ。我等貢を拂はむより前に槍先と刃、烈しき戰先づ我等が仲を治めざるべからず。」(註五)

(ll. 62–67.) 茲に於て（彼［Byrhtnoðは］）人々に楯を帶びて行けと申しぬ。されば彼等盡く岸邊に立ちにけり。其處にて軍勢は、水のため、他〔相手方〕の許へ（行く）能はざりき。干潮の後、上汐滔々として其處へ來りぬ。潮の流は相會ひぬ。彼等が一同槍を持ちゆく時までは、彼等には餘りにも長く

思はれしなりき。

(ll. 68–78.) 彼等 Eastseaxe [Essex の人々] の精鋭と海賊の軍勢とは陣列整へて其處に Pante の流れ(註四)を圍みぬ。たゞ人が箭の飛來のために死を得ることを除きては、彼等の中何者も他を傷くること能はざりき。潮は出で去りぬ。かの船人ら、戰に餓えたる海賊ら許多(あまた)は支度整へて立てりき。爰に於て、武士等を護り給ふ君 [Byrhtnoð] は、勇猛なる武士にかの橋を守ることを命じ給ひき。彼は Wulfstan と呼ばれ、その一族中の豪の者なりき。そは Ceola の子、己が槍もて、かの橋の上へ大膽不敵にも進み出でたる最初の男を射殺しける者なり。

(ll. 79–83.) 其處には怖れを知らざる武者、雄々しき二人 Ælfhere と Maccus, Wulfstan と共に立ちてありき。彼等は淺瀨のほとりにて逃亡なさむことなど思はず、否彼等武器を振ひ得し間ぢう、毅然として敵(あた)に向ひて身を防ぎけり。

(ll. 84–88.) 彼等〔海賊等〕其處にて手强(ごは)き橋の守り手に出會ひしことを認めとくと見し時、忌はしき敵(あた)共は爰に於て奸計を廻らし始めつ。(橋上に)登ること、その淺瀨を渡り、軍勢を率ゐゆくことを許されむことを求めつ。

(ll. 89–95.) 爰に於て太守は、己がうけばりたる心の故に餘りに多くの土地を忌はしき國人に讓り始め給ひけり。Byrhthelm の子 [Byrhtnoð] は、爰に冷き水の彼方へ呼ばはり始め給ひつ。「いざ、汝等

に道は開かれしぞ。武士共速かに我らが許へ戰に來れ。何人この戰場を我物顏になし得むかは神のみぞ知り給ふ。」

(ll. 96–107.) 爰に於てかの殺戮の狼共、海賊の大群は――水をものともせざりしなり――Pante を越えて西へ渉りぬ。船乘らは楯を陸へ運びけり。Byrhtnoðは勇士らと共に其處に敵共に向ひ備へ整へて立てりき。彼 [Byrhtnoð] は、楯もて障壁を作り敵共に向ひ確と軍を護れ、と命じぬ。かくて戰、いくさの譽は近づけり。定命盡きたる人々の斃るべき時は來りにけるなり。其處に叫聲は擧げられ、鴉、腐肉に餓えたる鷲は廻り翔りつ。地上には叫喚ありき。

(ll. 108–121.) 爰に於て彼等は手より鑢の如く硬き槍、磨ぎすましたる槍を翔ばしめぬ。弓は忙しかりき。楯は槍を受けつ。この攻撃は激しかりき、孰れの側にも人々は倒れぬ。若者らは横たはりぬ。Byrhtnoðの血族、Wulfmær は傷けられて殺戮の床を擇びき。(註十二) 彼 [Byrhtnoð] の姉妹の子なる彼 [Wulfmær] は、劍もて甚しく斬り下げられしなり。その時海賊等に返報與へられき。我が聞きたる處によれば、(註六) Eadweard は己が劍もて一人の者を甚しく斬りつけぬ。打擊を罷めざりき。されば彼の足下に瀕死の武者は倒れつ。この故に彼の主君 [Byrhtnoð] は、機を得し時この近侍に謝言を述べ給ひけり。

(ll. 122–126.) かくの如く、猛き武士らは戰に持場を守りき。何人ぞ眞先に其處にて運盡きたる者共の命を奪ひてむかと武器もてる武士らは意氣込みて思ひき。屍は地に倒れつ。

(ll. 127–142.) (人々) しかと立ちてけり。Byrhtnoth は彼等を勵まし、武者ら何れも Dene [Danes](註十四) にあたりて譽をかち得むと思はむ者は戰に心せよと命じぬ。

時に戰に剛き者〔海賊の一人〕進み來りつ。禦ぎのために武器、楯もたげて、この人に向ひ歩み來りけり。劣らず心きつと太守もこの賤しき者に向ひて進み給ひき。彼ら孰れも他に對し禍を念じたりき。軈てその船人は南國(渡來)(註七)の槍を送りつ。されば武士等の主君は傷き給ひにけり。彼、楯もて押し給へば、その柄は折れ、槍は碎け、かくてそは跳ね返りつ。この武人は憤り給ひき。彼、投槍もて己れに傷與へにし傲れる海賊を刺し給ひけり。この武人は老巧なりき。彼は己が槍を、この若者の首に貫き入らしめ給ひき。——手、導きにけり——かくて彼、この敵の命を奪ひ給ひけり。

(ll. 143–148.) やがて彼他の一人を速かに射給ひければ、その(男の)胸甲は切れぎれに破れぬ。彼は胸甲を通して胸に傷を受けぬ。彼の心臓には毒つけたる切先突き立ちしなり。かの太守は彌々心晴れやかなりき、この勇士は笑ひて、彼に天帝の與へ給ひける其日の仕事に禮を申し給ひぬ。

(ll. 149–158.) 時に〔敵の〕武士の一人は手より、掌より槍を飛ばしめぬ。さればそは放たれ行きて Æthelred の身分貴き上士を貫きぬ。彼の側には年端ゆかざる武士、戰に於ける從者立ちてありき。彼、Wulfstan の子、若き Wulfmaer は、いち速くこの人より血に染みたる槍を引き拔きぬ。手嚴しく(槍を)返りゆかしめぬ。切先は貫き入り、さきに彼の主君を激しく擊ちし者は地上に横たはりき。

(ll. 159–172.) 軈て武具に身をかためたる男、かの君の許へ進みぬ。彼はこの武人の頸飾、衣服や寶環及び（寶石を）鏤めたる劒を奪はむと思ひしなり。茲に於て Byrhtnoð は幅廣く鳶色の刃ある劒を鞘より引き拔きかの胸甲の上へ斬りつけぬ。餘りにも速かに船乘らの一人は此太守の腕を傷け、彼を妨げ、かくて黃色の柄ある劒は地に落ちぬ。彼は硬き劒を保ち、武器を揮ふこと能はざりき。而もなほ髮白き武人は次の言の葉を語りぬ。武士等を勵まし、雄々しき部下等に進み行けと命じぬ。この時もはや兩足の上にしかと立ち給ふこと能はざりしなり。天の方を眺め給ひぬ。——

(ll. 173–180.)「人々を統べ給ふ君（神）よ。我は、此世にて我が享けしあらゆるかの歡びに對し謝し奉る。慈悲深き神よ、今や我は、わが魂が君のみ許へ旅しゆき、天使達の主よ、君がみ國へ恙なく赴き得るやう、わが魂に幸を賜はらむことを何にもまさりて求むるなり。我は、そを〔魂を〕惡魔らが苦しむる能はざらむことを君に祈願し奉る。」

(ll. 181–197.) この時、邪宗の武士らは彼と、彼の傍に立てりし男ら双方を斬り倒しぬ。Ælfnoð と Wulfmær とは殺されて横たはりぬ。彼等の主君によりそひて命をうち棄てしなり。爰に於て其處に居ることを望まざりし者共は戰より踵を返しぬ。其處にて Odda の子 Godric は戰より眞先に逃れ、而して彼に屢〻幾頭となく馬を與へ給ひしかの善き人を見棄てしなり。彼は己が主君の所持し給ひけるその馬の馬具上に跳び乘りき、そは正しきことにはあらざりき。而して彼の兄弟ら Godwine と Godwig と

は孰れも彼と共に奔りぬ。戰を思はず、否戰より踵を回らしてかの森へ赴き、その砦へ逃れ込みて己が命を救ひぬ。而してもしも彼等が、彼等のために彼［Byrhtnoð］がそれまでなし給ひたりし引立ての盡くを想ひしならば、いやしくも相應しかりしならむよりも多くの人々も（森へ逃れ込みて己が命を救ひしなり。）

(ll. 198–201.) （こは）嘗て Offa が評定を行ひしとき、評定の席にて、後に緊急の時に當りては持ち堪ふることを望まざる多くの者らも、其處にては雄々しげに物言ふと曩に申しける通りなりけり。

(ll. 202–208.) 今やかの民草の主、Æpelred の太守は倒れ給ひぬ。總ての家臣らは、彼等の主君の倒れ給ひしを見たり。茲に於てか心ある臣達、豪膽なる人々は進み出で、ひたすらに急ぎぬ。彼等總ては命を棄つるか慕はしき君の仇を報ゆるか、二つに一つを望みしなり。

(ll. 209–224.) Ælfric の子、年若き武士は、次の如く彼等を勵まし進ましめ言葉もて語りぬ。Ælfwine は茲に申しぬ、心きつと申しけり。——

「我等が屢々酒宴にて語りしかの言葉を想へ。その時我等武者らは館の中椅子の上にて、惡戰苦鬪につき誇らかなる言葉を擧げしなりき。今や何人が勇あるかは試さるべし。我はわが家柄を凡ゆる者に知らしめむ。——我は Miercan［Mercians］の中の大いなる一族に生れ、わが老ひたる父は Ealhelm と呼ばれ、心賢にして、此世に榮えたる領主なりき。今やわが主君、戰に斬倒され横たはり給ひけるからに

は、我がこの戰より故郷へ赴かむと望めりとて、かの國［Mercia］にて上士等我を責むることなからしめむ。そは我に取りて痛手の最も大いなるものなり。彼［Byrhtnoth］は我が親族たりしと共に又我が主君に在はしき。（註八）」

（ll. 225-229.）かくて彼は怨をふくみて進み出で、遂に彼はかの群の中なる一人の海賊を槍先もて擊ちければ、其者は彼の武器に殺されて地上に横たはりつ。茲に於て（彼は）朋輩、味方や仲間を勵まし始めぬ、されば彼等は進み出でけり。

（ll. 230-243.）Offa は申しき、――しなの木の槍をうち振りぬ。――

「やよ、Ælfwine, 汝は家臣らすべてを危急に際して勵ましぬ。今や我らが殿、領主の地上に横たはり給へるからには、我ら孰れも武器、硬き劍、槍とよき刀とを持ち握り得るかぎり、他の武士を戰へ鼓舞すること我等凡てに肝要なり。Odda の卑劣なる一子、Godric は我等すべてを裏切りぬ。彼が馬、かの誇らかなる駒にうち跨り行きし時には、あまりにも多くの人々何れもそが我等の主君なりと思ひき。この故に此處、戰場にて軍勢は離散し楯の列は崩されけるなり。此處にて彼が斯くも多くの者を何れも奔らしめたる彼の所行に禍あれ！」

（ll. 244-254.）Leofsunu は申しき、而してしなの木の楯を、禦ぎに楯をさし擧げぬ、彼はこの人［Offa］に向ひて申せしなり。――

「我は、我がここより一歩たりとも逃るゝことを思はず、否いよゝ進みて闘ひにわが主君の仇を報ひむと望めることを誓ふものぞ。今やわが君斃れ給ひけるからには、われ主なくして戰より踵を返し故郷へ赴くとて、心ゆるがざる武士ら Sturmere のほとりにて言葉もて我を咎むるの要なかるべし。否、武器、切先と鋼に此身を奪はしめむ。」(註九) 怒氣滿々として彼は踏み出で、決然として戰ひぬ、逃ぐるを蔑みしなり。

(ll. 255–259.) 時に老ひたる歩卒 Dunnere は申しぬ、——槍をうち振りつ 人々何れも Byrhtnoðの仇を報ひ奉りてむと凡ゆるものゝ上に叫び立て求めけり。——

「軍中にて殿の仇を報せむと思ふ者はつゆためらふべからず、又(己が)命を氣遣ふべからず。」

(ll. 260–265.) かくて彼等は進み出で、命をものともせざりき。かの一族郎黨、猛る武者ら [lit. 「槍持つ人々」] は激しく戰ひ始めぬ。而して、彼等が己の主君の仇を報じ、己が敵人らの中に潰滅を起し得むことを神に祈りき。

(ll. 266–272.) かの人質(註十)は、彼等を一心に助け始めぬ。彼は Norðhymbre [Northumbrians] の中にて強豪なる一族の者にて、Ecglaf の子なりき。彼の名は Æscferð なりき。彼はこの戰に些かも怯むことなく、否矢つぎ早に箭を送り出だし、或は楯の上を射、或は人を傷つけ、彼が武器を振ひ得し間ぢう、屢々若許の傷を與へぬ。

(ll. 273–279.) 時になほ陣中には丈長の Eadweard,(註十一) 身構へなし、心はやりて立てりき。彼は、己が主君の倒れ給ひしからには、土地の一歩だに逃れじ、背を向けまじとて誇らかなる言葉を申しき。彼はかの楯の壁〔列〕を破り、武士らと戰ひ、遂に己が主君〔lit.「寶物を與へ給ふ君」〕の仇をかの海賊共に華々しく報ひ、軈て己も屍の中に横たはりぬ。

(ll. 280–285ᵃ.) Sibryht の兄弟、身分高き朋輩、熱烈にして心はやれる Æþeric と、いとも數多の他の者何れも斯の如くなし、一心不亂に戰ひぬ。彼等は中凹みたる楯を裂き、毅然として禦ぎぬ。楯の輪縁は破裂し胸甲は恐怖の歌の一つを唱ひぬ。

(ll. 285ᵇ–294.) 時に Offa は戰にて海賊を擊ちぬ。されば彼は地上に倒れつ。而して其處にて Gadde の血族〔Offa〕も大地へ赴きぬ〔倒れぬ〕。Offa は戰にて忽ち斬倒されしなり。然れども彼は、己が主君に誓ひしことを、曩に彼が寶環を與へ給ふ君〔主君〕に向ひて誇りし通り爲し遂げたりしなり。即ち彼等兩人は恙なく故郷、城市の中へ騎り入るか、然らずんば軍中に死なむ、殺戮の場にて創に倒れなむ、となりき。彼は上士に相應しく主君の側に横たはりけり。

(ll. 295–300.) 茲に於て楯の破壞は起りぬ。海賊共は戰に心焦立ちて進みぬ。屢〻槍は死期定まれる者の命の館〔身體〕(註十二)に貫き入りぬ。Purstan の子、Wistan は進み出でゝそれ等の男らと戰ひぬ。Wigelin の子〔Wistan〕は屍の中に横たはるよりさき、群集の中にて彼等の中三人を殺す者となりたりき。

(ll. 301–308.) 其處には激しき合戰ありき。武士らは戰の中に毅然として立ちぬ。武士らは創に力衰へて倒れ、屍は地の上に落ちぬ。Oswold と Eadwold, かの兄弟兩人は終始人々を勵まし、己が血族の者らに、彼等が其處にて危急に當りて持ち堪へ、雄々しく武器を用ゆべしと言葉もて求めぬ。

(ll. 309–319.) Byrhtwold は申しき、楯を握りぬ。彼は老ひたる家臣なりき、槍をうち振り、いとも雄々しく人々に訓へぬ。——

「我らの力衰ふるにつれて所存はいよゝ固く、胸はいやましに雄々しく、勇氣はいやまさりて大いならざるべからず。此處に我等のよき主君は全く斬倒されて砂上に横たはり給ふ。今この戰鬪(たたかひ)より去り行かむと思ふ者は、永久(とこしへ)に嘆くことならむ。我は年老ひたり。逃れむことを我は思はず。否わが主君の傍に、かくも慕はしき御方の近くに斃れむとこそ思へ。」(註十三)

(ll. 320–325.) 又 Æþelgar の子、Godric も同じく彼等すべてを戰へと勵ましぬ。屢々彼は投槍、殺人の槍をかの海賊ら目がけて飛ばしめつ。かくして彼は軍中にて眞先に進み、斬り又倒し、やがて彼も戰の中に斃れぬ。そはこの戰より逃れしかの Godric にてはあらざりしなり。……

* * *

(註一) 此詩は、前節に述べた如く頭初と終りとが缺けてゐる (Wanley からの引用文參照)。此行は後半が殘つて居るばかりで、原文、"brocen wurde" の主語は分らない。

(註二) "Offan mǽg." 名は不明。

(註三) Anglo-Saxon 人が鷹狩をしたことに就ては、詩に屢々出てゐる。例へば、*Beowulf*, ll. 2263-2264 ; *Gnomic Verses* (MS. Cotton), ll. 17-18 ; *Be monna wyrdum*, l. 86. 海賊らの襲つて來た時、Byrhtnoð 自身は鷹狩をしてゐたものとも解される (Körner, *loc. cit.*)。

(註四) Byrhtnoð の軍勢と海賊とは、Pante 河 (今日の Blackwater 河。cf. l. 68 : 'Pantan stréam' ; l. 97) を隔てゝ對峙してゐたのである。

(註五) 此部分の原文 (ll. 60-61) は第四節 (三五頁) 參照。

(註六) "Gehyrde ic" 「我聞けり」といふ句は、ゲルマニアの古詩にあつては常套的なものである。Anglo-Saxon では、'Mine gefræge' (*Beowulf*, 776, 837, 1955, 2685, 2837), Old High German では、'ik gihorta ðat seggen' (*Hiltibrantslied*, 1), Old Norse では 'heyþak segga' (*Odrúnargratr*, 1) など、其他此意味の言ひ廻しは多い。

(註七) 'súþerne gár.' 文字通りには「南方の槍」。「南から投げた槍」の意に解する說もある (Sedgefield)。然し筆者は「南國 (フランス乃至イタリア) 渡來」の意にとる。紀元八七二年の Hofsfjord の戰を敍した古代 Norway の詩 *The Battle of Hafsfjord*, st. 2 に次の句がある。——

Hlaðnir váru hölða ok hvíta skjalda,

vigra vestrœnna ok Valskra sverða.

(それら〔船〕は武士らと白き楯、西方渡來の槍とフランス渡來の劍が積まれてあつた。) N. Kershaw, *Anglo-Saxon and Norse Poems*, Cambridge, 1922, p. 90.

(註八) 原文 (ll. 212-224) は第四節 (三九—四〇頁) 參照。

(註九) 原文 (ll. 246-253a) は第四節 (四〇頁) 參照。

（註十）‘Gysel.’人質となつた者が、自分を人質に取つてゐる者のために戰ふことは、又 *Anglo-Saxon Chronicle*, 七五五年の項にもある（「たゞ一人 Brit-Welsh の人質以外、彼等みな倒れたりき、而してそれも甚しく傷きてありき。」‘hig ealle ofslagene wæron .buton anum Brytwyliscum gisle.’ MS. E. ed. Earle-Plummer, I, p. 49）。Waldhere と Hagena の話（*Walthavius ; Waldhere*）もこれを示すものと考へられる（H. M. Chadwick, *The Heroic Age*, Cambridge, 1926, p. 351）。

（註十一）‘Eadweard se langa.’この綽名は、l. 117 の Eadweard とは別人を指すものと思ふ。

（註十二）「段戮の床を擇びき」（‘wælræste gecéas’ : l. 113）；「命の館」（‘feorhhús’ : l. 297）。海のことを「鯨の路」（‘hronráð’）と言ひ、牡鹿を表はすのに「荒野の濶歩者」（‘hæðstapa’）といふ、この種の詩語を‘kenning’といひ、ゲルマァニアの古詩に多い。「段戮の床を擇びき」は戰で「斃れた」の意。*Beowulf*, l. 2902 には‘wunaðwælreste’「段害の床を占め給ふ」といふ句がある。拙稿、“Kenningar in Beowulf” (*English Literature and Philology*, Vol. I [1930], pp, 1-8) 參照。

（註十三）原文（ll. 312-319）は、第四節（四〇—四一頁）參照。

（註十四）第一節註十一（九頁）參照。

四

Maldon の戰の後、Æthelred 王は、Canterbury の大僧正 Sigericらの提案により、Olaf Tryggvason に二萬二千ポンドの貢を支拂つて和を請ふた（前節二參照）。

古代の Germania 人にとつては、敵に貢を支拂つて和を求めるといふことは實に堪へ難い屈辱であつた。Maldon の戰よりおよそ九百年の昔、ロオマの史家 Tacitus は、貢を支拂ふことはゲルマァニア人

でない證據であるとまで考へてゐる（*Germania*, 43）。Cotini 族はゴオル語を使ひ、Osi 族はパンノニア語を使ふ。彼等の言語によつて彼等がゲルマアニア人でないことが分る。然し又彼等は Sarmatae 族や Quadi 族の課した貢を甘んじて拂つてゐる。このことも彼等がゲルマアニア人に非ずといふことを示してゐる、――といふのである。Cotinos Gallica, Osos Pannonica lingua coarguit non esse Germanos, et quod tributa patiuntur（ゴオル語は Cotini〔族〕の、パンノニア語は Osi〔族〕の Germani にあらざることを示してゐる。そして〔彼等が〕進貢の義務を忍んでゐることも〔これを示してゐる〕）。Tacitus がゴオル人を輕蔑し、ゲルマアニア人を高く評價してゐたことは彼の書物の方々に表はれてゐる。右の一節もその一つの表はれであると見られる。然し事實ゲルマアニア人は敵に貢を拂ふことを非常に屈辱と感じ、貢を支拂ふよりは寧ろ自己よりも強い敵を向ふに廻して戰ふことを望んだといふことを示す例がある。イタリア北部の Langobardi の出なる Paulus Diaconus（ca. 725–799）が『ロンバルド史』*Historia Langobardorum*, I, 7 で語る所によれば、Langobardi の君主 Ibor と Agio とは、彼等よりも強力な Vandali のために惱まされた擧句、「武器を以て自由を維持する方が、貢の支拂ひによつてそれを汚辱するよりもましである」（'Melius esse armis libertatem tueri quam tributorum eandem solutione foedare'）といふ決斷に到達した、といふ。(註一)

（註一）Rudolf Much, *Die Germania des Tacitus*（*Germanische Bibliothek*, I. Abt.), Heidelberg, 1937, S. 376.

Maldon の戰に於て、海賊の使者が平和と引換へに黄金の貢を要求した時、白髮の Byrhtnoð は槍をしごき、怒氣滿々として答へた。——「我等貢を拂はむより前に槍先と刃、烈しき戰先づ我等が仲を治めざるべからず。」

ús sceal ord and ecg ǽr geseman
grim guðplega, ǽr wé gafol syllon.

——*The Battle of Maldon*, ll. 60, 61.

かくて戰の幕は切つて落されたのであつた。ここに我々は、Germania 古來の精神が烈々たる氣を吐いてゐるのを感じる。

激戰のうち Byrhtnoð は海賊の投槍に一度二度と深傷を負ひ、遂に數人の敵の刃を受けて倒れた。隊長の倒れたのを見た Odda の子 Godric は眞先に、繫いであつた主君の馬に跳び乘り、その兄弟 Godwine や Godwig らと共に戰場より踵を返して逃れた。然し心ある部下らは一歩たりとも退かうとはしなかつた。「彼等總ては命を棄つるか慕はしき君の仇を報ゆるか、二つに一つを望みしなり。」

hí woldon þá ealle oðer twega,
líf forlǽtan oððe léofne gewrecan.

——ll. 207, 208.

Tacitus は *Germania*, 14 に於て次の樣に述べてゐる。――「戰列へ臨んだ時には、隊長にとつて勇敢さに於て凌がれることは恥づべきであり、部下にとつて隊長の勇敢さに匹敵しないことは恥づべきである。のみならず、己が隊長よりも生き延びて、戰列より退いたといふに到つては實に終生の不名譽であり、且又恥辱である。彼〔隊長〕を護り、助け、又自分ら自身の立派な手柄を彼の榮譽に歸屬せしむることは忠義の最なるもの〔lit. 主要な忠義の誓〕である。隊長らは勝利のために戰ひ、部下らは隊長の爲に戰ふ。」(Cum ventum in aciem, turpe principi virtute vinci, turpe comitatui virtutem principis non adaequare. iam vero infame in omnem vitam ac probrosum superstitem principi suo ex acie recesisse : illum defendere, tueri, sua quoque fortia facta gloriae eius assignare praecipuum sacramentum est : principes pro victoria pugnant, comites pro principe.)(註二)

(註二) Much のテキストに據る (S. 159)。臣下が主君と其運を共にすることが彼等の義務であり、これを破ることは非常に恥づべきことゝ考へられた。『ロオマ帝國史』を書いた Ammianus Marcellinus (ca. 330-400) は彼の同時代の敍述が殊に正確とされてゐるが、彼の語る所によれば (XVI, 12, 60)、シュトラスブルグの戰で Julianus は Alamanni (ゲルマアニア人) を敗つた。敗れた王 Chnodomarius はロオマに降り、捕虜となつた。玆に於て、二百名を算する彼の臣下と三名の最も親密な友人等は王に倣つて自ら捕虜になつた、といふ。comites…flagitium arbitrati post regem vivere, vel pro rege non mori, si ita tulerit casus, tradidere se vinciendos. (從者らは、〔彼等が〕王の後に生存することや、或は又事態がその樣に〔王のために死する樣〕要求する場合王のために死なざることは、恥づべき行ひと考へたので、囚虜として自らを引渡してしまつた。) (R. Much,

Die Germania des Tacitus, S. 161. に引用されたものに據る。)

この精神は傳へられて八世紀前半の作とされる Anglo-Saxon の敍事詩 *Beowulf* にも現はれてゐる。Geatas の王 Beowulf は國土を荒す火龍を退治せむとて、十一人の部下と共に龍の洞窟へ到着した。激怒した龍の姿のあまりの恐ろしさに、部下等は主君を見棄てゝ森の中へ逃げ込んだ。たゞ一人 Wiglaf のみは、主君が單身危難に曝されてゐるのを見て大いに恥ぢ、直ちに戻つて主君と力を併せ、遂に火龍を斃した。然し龍の吐く毒氣に當たつた Beowulf も軈て息絶えてしまつた。Wiglaf は、逃亡して己が生命を全うした者らを責めた擧句、かう言つた。——「貴人等遠くより汝等の逃亡、不名譽なる行を聞きてよりは、その一族の人々何れも土地の權を奪はれて彷徨はざるべからざるなり。武士等の何れに取りても恥の生よりは寧ろ死の方よきなり。」

londrihtes mót

þǽre mǽgburge monna ǽghwylc
ídel hweorfan, syðþan æðelingas
feorran gefricgean fléam éowerne,
dómléasan dǽd. Déaþ biþ sélla
eorla gehwylcum þonne edwítlíf.

「モオルドンの戰」の歌(厨川)

——*Beowulf*, ll. 2886ᵇ–2890.[註三]

不忠の汚名を着て生き延びる位なら死んだ方がましだ、といふのである。この comitatus の精神が、當時のイギリス人の心に脈々として生きて居り、この精神を表はした文學が彼等の魂に深い共感を惹き起したことは明かである。キリスト教宣教師が England へ渡つて來てキリストとその十二使徒とを說いた時、Anglo-Saxon 人の心を最も強く捉へたものは、キリストと使徒との關係が、彼等の隊長と部下との關係に似てゐるといふことであつた。キリストはその愛のために殉難し、使徒らはキリストの爲に殉難する。類似は明白である。[註四] キリスト教に題材を採つた Anglo-Saxon の詩に、キリストを 'þéoden' (主君) とし使徒を 'þegnas' (臣下) として表はした例は極めて多いが、中には *Andreas*, ll. 405 ff. の如く comitatus の精神までも表はさうとした場合がある。[註五] この樣な現象が OE. Christian poetry に見られたといふことは、之等の詩の作られた時代の Anglo-Saxon 人が、comitatus の精神に深い共鳴を感じたからに他ならない。

（註三）F. Kuriyagawa, *Beowulf and the Fight at Finnsburg*, pp. 195 f.

（註四）*Germania*, 14 よりの引用文（三六頁）參照。

（註五）OE. Christian poetry に現はれた comitatus の精神に就ては、拙稿『古代英詩に關する一考察』（日本英文學會編「英文學研究」、第十五卷第二、pp. 173-182）參照。

Maldon の戰に、逃亡した Godric を罵り、主君の仇を報ひむと互に勵ましつゝ一歩も退かず、一人

一人殺れて行つた武士らの叫びの中には、彼等の遠き祖先の氣魄がそのまゝに迸つてゐるのである。その例としてこゝに若き武士 Ælfwine の言葉 (ll. 212 ff.)、Leofsunu の言葉 (ll. 246 ff.)、Byrhtwold の言葉 (ll. 312 ff.) を原文で引用する。——

"Gemunaþ þá mæla, . þe wé oft æt meodo spræcon,
þonne wé on bence, béot áhófon,
hæleþ on healle, ymbe heard gewinn ;
nú mæg cunnian hwá céne sý.
Ic wylle míne æþelo eallum gecýþan,
þæt ic wæs on Myrcon miccles cynnes ;
wæs mín ealda fæder Ealhelm háten,
wís ealdorman, woruldgesælig.
Ne sceolon mé on þáere þéode þegenas ætwítan,
þæt ic of þisse fyrde féran wille,
eard gesécan, nú mín ealdor ligeþ
forhéawen æt hilde ; mé is þæt hearma máest ;

hé wæs ǽgðer mín mǽg and mín hláford''

——ll. 212–224.

*　　*　　*

''Ic þæt geháte, þæt ic heonon nelle
fléon fótes trym, ac wille furðor gán,
wrecan on gewinne mínne winedrihten.
Ne þurfon mé embe Stúrmere stedefæste hælæð
wordum ætwítan, nú mín wine gecranc,
þæt ic hláfordléas hám síðie,
wende fram wíge ; ac mé sceal wǽpen niman,
ord and íren.''

——ll. 246–253[3].

*　　*　　*

''Hige sceal þé heardra, heorte þé cénre,
mód sceal þé máre, þé úre mægen lýtlað.

Hér líð úre ealdor eall forhéawen,
gód on gréote ; á mæg gnornian
sé ðe nú fram þís wígplegan wendan þenceð.
Ic eom fród féores ; fram ic ne wille,
ac ic mé be healfe mínum hláforde,
be swá léofan men, licgan þence."

——ll. 312–319.

*　　*　　*

Maldon の戰で勝利を得たのは Norway 軍であつた。然しこの戰によつて、イギリス人が Æthelred 王の時代に於てもなほ、若し古への精神を傳へた武將が陣頭に立つて指揮をすれば、どの程度に精悍な Northmen に對抗し得るかゞ明かに示されたのである。けれども又、この戰にイギリス軍には Godric 兄弟の如き卑劣な逃亡をなすものもあつた。不幸にして、今や Æthelred 王の政策を支配したものは、Byrhtnoð の部類に屬する人物ではなくて、Godric らと類を同じうする人間であつた。かの老ひてなほ意氣凛々たる Byrhtnoð は貢を支拂つて海賊に和を請ふことを怫然として拒絶した。所が未だ年若うして血氣盛なるべき Æthelred 王やその顧問官らに取つては、これが採るべき唯一の手段と考へられたの

である。Byrhtnoth とその忠烈な部下らが此世を去つた紀元九九一年はまた、イギリス王が海賊に「最初の貢」(註六)を捧げて和を求めた年であつた。貢を取つた海賊らは一時は退いて和を守るが、やがて又押し寄せて掠奪を恣にする。九九一年以降の年代記を繙けば、戰つては敗走し、敗れては貢を支拂ひ、甚だしきに到つては戰はずして逃亡し、敗れずして貢で和を請ふ悲慘なイングランドの姿が次々に現はれて來る。「屢々戰に際し一人（のデイン人）よく十人（のイギリス人）を敗走せしむることあり」といひ、「我等は常に彼等に支拂ひをなし、彼等は日々我等に辱しめを與ふ。彼等は破壞し、燒き、掠奪し、押收して船へ運ぶ」と言つたあの十一世紀初頭の York 大僧正 Wulfstan の言葉(註七)は何等の誇張をも含んで居ない。イギリス人の魂に傳へられた Germania の傳統的英雄精神は、九九一年 Maldon の戰に最後の光輝を放つたまゝ彗星のごとく消え失せたのである。

（註六）"arest gafol" (*Ang. Sax. Chron.* MS. E.；第二節〔一二頁〕に引用した anno 991 の項の全文を參照。)

（註七）第一節の引用文（七頁）參照。

（一九三七・十二・十七）